

高水温に伴うサンゴの白化現象

近年、海の温暖化の影響により、これまで温帯域ではほとんどみられなかった夏季の高水温に伴うサンゴの白化現象が、高知の海でも発生するようになりました。

■サンゴの白化とは

白化とはサンゴの体内に共生する褐虫藻（かっちゅうそう）と呼ばれる植物プランクトンの仲間が、サンゴの体内から抜け出し、骨が透けて真っ白に見える現象です。サンゴの多くは褐虫藻が光合成により作り出した栄養に依存して生きているため、種類によっては白化した状態が長く続くと栄養不足になって死んでしまいます。このようなサンゴの白化は、様々な環境要因によって引き起こされますが、近年、サンゴ礁海域では夏季の高水温に伴うサンゴの白化が大きな問題となっています。これによって非常に広い範囲のサンゴが一度に死滅してしまうことがあり、沿岸の生態系の大きな攪乱につながるからです。

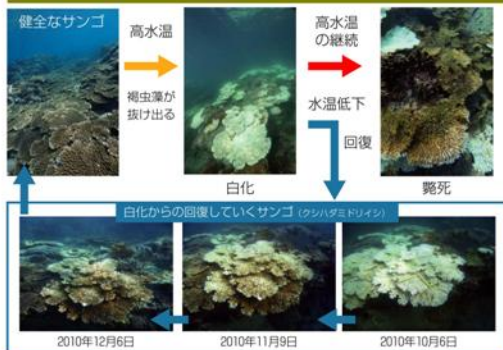


▲ 褐虫藻
大きさは0.01mm程度

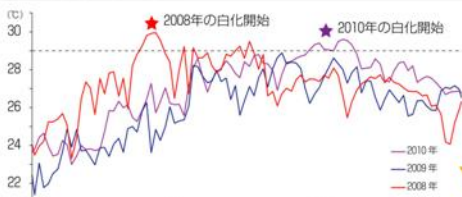


▲ 高知で起きたサンゴの白化の様子
(2010年10月5日 高知県幡多郡大町西泊地先)
(左：海上からみた様子 右：海中の様子)

白化の進行と回復



海水温の変動と白化の発生



大町西泊地先における夏季の海水温変動（日平均値）
（水深5mでの連続測定結果）

■高知におけるサンゴの白化と温暖化

高知県では1990年代末まで夏の高水温による規模の大きなサンゴの白化はみられませんでした。しかし、2000年代に入ると夏白化するサンゴが多くみられるようになり、2008年と2010年には過去になかったような規模の大きな白化現象が観察されました。幸い、高知県で起きたこれまでの白化では高水温の期間が比較的短く、水温低下とともに多くのサンゴが回復したため、大きな被害は出ていません。しかし、今後さらに温暖化傾向が進めば、今後、高知の海でもサンゴ礁海域と同様に、サンゴの大量斃死につながるような深刻な白化現象が起こる可能性があります。

西泊地先では2008・2010年とも、海水温が29℃を上回る期間がある程度長く白化が起きています。水温が29℃以上にならなかった2009年には白化はほとんど発生していません。